



天才を生んだ孤独な少年期
ダ・ヴィンチからジョブズまで
熊谷高幸

ダ・ヴィンチ

ニュートン

エジソン

夏目漱石

アインシュタイン

ジョブズ

天才の少年期には
共通する「心の癖」が
あった

自閉症から日本語まで
幅広い視点で研究する著者が
脳科学の発見も取り入れ
天才たちの人生を

たどりなおす

新しい天才論！



天才を生んだ孤独な少年期
ダ・ヴィンチからジョブズまで 熊谷高幸

はじめに

この十年あまり、天才と呼ばれる人々の人生をたどってみて発見したのは、そこに共通して、少年期に驚くべき孤独が存在したということだった。

ここでいう天才とは、世の中の文化を変えるような仕事をした人々である。能力が飛び抜けた人全体を指すわけではない。そして、新しい世界を生み出すための苦悩を経験した人々である。

天才とは、このように、すでにある世界と対決した人々だから、そこに孤独があるのは容易に想像できる。では、彼らは天才となる中で孤独になったのだろうか？ 実はそうではなくて、少年時代から孤独であり、それが天才を生み出した、とするのが本書の内容である。

この本で取り上げるのは、ダ・ヴィンチ、ニュートン、エジソン、夏目漱石、アインシュタイン、ジョブズである。この人たちは、天才というとまず頭に浮かぶような人物ばかりである。だから、私の考えに都合のいい人たちだけを特に選び出したわけではない。これらの人たちの

人生には、天才に不可欠なものが典型的な形で含まれているのである（なお、六人の天才の中に漱石を入れたのは、そこに日本人も含めておきたかったという理由もあるが、もうひとつ、漱石自身、優れた天才論を示しているから、という理由もある）。

彼らの少年期は、特異な生育環境や特異な認知の性質によって、そして多くの場合はその両方によって非常に孤独なものとなった。そのいきさつをたどり、それが彼らの天才にどのようにつながっているのかを明らかにしていくのがこの本の内容である。しかし、通常では手に入りにくい資料を発掘し、新事実にもとづいて叙述しているわけではない。本書で用いた資料は日本国内で簡単に手に入るものばかりである。しかし、そうして集めた人生を並べてみると、多くの共通点が見つかり、天才の共通構造のようなものが見えてくる。それをここで明らかにしておきたいと思ったのである。

ところで、なぜ私は天才の人生を探るようになったのか？ それは、次のような二つの理由による。

その第一は、天才とは凡人には窺い知ることのできない高みにいる人々であるというよくある考えを撤回してほしかったからである。天才が偉業を達成できたのは結局、天才だったから、と見なされてしまうことが多い。しかし、天才も私たちと同じ人間である。その同じ人間が、ある条件のもとで成長すると天才になると考えたからである。そして、この条件について、

ある程度説明できるようになったと思っただけからである。また、天才をこのように捉えることによつて、私たちは、その人生を共感をもつて見つめ、そこから多くを学びとることができる。

そして、第二の理由は、私がこの四十年ほどのあいだ、自閉症の研究をしてきたことに関係している。自閉症の人は、人間の認知の様々な有りようを見せてくれる。彼らの中には、複雑な計算の解を一瞬にして出したり、何十年も前の日付を聞いただけでその曜日を当てたりすることができ、サヴァン症候群と呼ばれる人々がいる。また、これと関連して、才能ある人々の周辺に自閉症の親族が存在したり、さらには、天才とされる本人が幼児期に自閉症を疑わせる症状を示していた場合があったりする（アインシュタインがこれに相当する）。また、視点を広げて、発達障害という観点から見ると、天才の中にはADHD（注意欠陥多動性障害）だったと考えられる者がおり、エジソンはその代表例である。

以上の事柄は、発達障害の人やその家族を勇気づける事実なので、近年よく書物で取り上げられるようになってきている。しかし、なぜ、発達障害が天才に関係しているのか、という理由はほとんど書かれていない。また、発達障害であれば天才になることができるのかという点と、決してそのようなことはない。しかし、そこにある認知の特性が天才の発生に関係しているのがある。

私は自閉症についてだけでなく、発達心理学についての研究者でもある。だから、人の心は

どのように発達するのか、というテーマの延長に、天才はどのように生じるのか、という疑問をもっている。その私が天才という問題を取り上げることにしたのは、そこに少年期の孤独と発達障害に関連する認知の特性が絡んでくると考えたからである。だから、この本は天才の発達心理学を目指すものであり、ダ・ヴィンチから始まる六人の天才についての叙述はそのケースタディである、と考えることもできる。

天才についての議論よりは、天才たちの人生をまずのぞいてみたいという読者は、1章を飛ばして2章に進んだ方がいいかもしれない。しかし、六つの人生には多くの共通点がひそんでいる。それを捉える視点として、1章と最終章である8章を参考にしていただければ幸いである。

*なお、通常の西洋の伝記では、たとえばアインシュタインのことを「アルベルト」と、姓でなく名で呼ぶのが一般である。しかし、日本人にとっては、西洋の人々をその幼少期についても姓で表す方がわかりやすいので、この方式をとることにした。また、六人の天才の伝記的な部分に関しては多くの資料を参考にしてている。それらは、巻末の参考・引用文献のところに章ごとにまとめて示してあるので参照願いたい。ただし、人生のひとつひとつの事実について出典を示すと読みづらくなるので、それは引用箇所に限ることにした。

目次

はじめに…………… i

1章 天才と孤独…………… 1

天才のライフステージ…………… 3

共有と非共有のあいだ…………… 4

孤独な境遇と非共有世界の拡大…………… 7

自閉症と共同注意の障害…………… 8

アスペルガー症候群とADHD…………… 11

常識・ルールを生む「心の理論」…………… 12

天才の位置…………… 15

天才と男性脳…………… 18

感覚過敏と初期の脳…………… 19

感覚遮断が創造性を高める…………… 24

デフォルト・モード・ネットワーク…………… 29

同化と調節による心の発達	30
天才の中にいる「もう一人の自分」	33
天才の共通特性	37

2章 レオナルド・ダ・ヴィンチ…………… 39

母との別れ	41
自然を友とする日々	42
ヴェロッキオ工房へ	44
師匠との共同制作	47
未完の作の数々	50
手稿の中に残されたメッセージ	53

3章 アイザック・ニュートン…………… 59

父を亡くして母を奪われる	61
物思いにふける内気な少年	63
日時計でいっぱいの部屋	65

「大学に行くしか能のないやつ」 66

ケンブリッジの孤独な免費生 68

デカルトとの対決 69

故郷の村で着想した三つの発見 72

内部世界の支配から外部世界の支配へ 75

晩年のニュートン 80

4章 トーマス・アルヴァ・エジソン……………83

不注意な子ども 85

三か月で小学校を退学 86

母が開いてくれた独学への道 89

車内売り子から新聞発行人へ 91

電信士のかたわら発明を始める 94

パーセントのひらめきと九十九パーセントの汗 96

二十世紀を発明した男 99

5章 夏目漱石……………101

生まれてすぐに里子に 103

仮の親と実の親 104

「何をしに世の中に生まれてきたのだ」 107

友との出会いと文学への道 109

親ゆずりの無鉄砲 111

不本意だった英国留学 113

『文学論』と大学講師の日々 116

漱石の天才論 120

一挙に花開いた小説世界 122

妄想癖と創作活動 125

わずか十年の作家生活 128

6章 アルベルト・アインシュタイン……………133

なかなかことばを発さない子ども 135

方位磁石のとりこになる	138
居場所がなかった軍隊式の中学	140
イタリアを経てスイスへ	141
スイス特許局に七年間勤める	144
奇跡の年	145
再びドイツに	148
二つの看板を背負った晩年	151
7章	
ステイブ・ジョブズ	155
生後すぐに養子に	157
集団活動が苦手な少年	159
エレクトロニクスとの出会い	163
中退した大学に通い続ける	166
菜食主義と禅の思想	167
アップル社の創業へ	170
パソコン業界のパイオニア	173
失意の日々	175

8章

天才と現代

アップル社への復帰	180
市場調査は必要ない	178
足早に、この世を去る	181

天才の基本構造	185
孤独が生み出すもの	187
創造力と妄想力	189
学校への不適応と支援者の出現	191
外側からの視点	193
天才のその後	195
三種類の天才	198
天才と現代の教育	200
天才とわれわれ	204

あとがき

目次

索引	222
引用・参考文献	213

装幀 白井新太郎
装画 ヤギワタル

1 章

天才と孤独

◎天才のライフステージ

「はじめに」で述べたように、天才の人生には孤独がつきまとう。では孤独は、彼らの人生のどの時期にどのように関係しているのだろうか？　そこで、天才の人生を次のような三期に分けて考えてみることにする。

第一期 天才的な仕事を始める前の少年期

第二期 天才的な仕事の形成期

第三期 天才的な仕事が世に認められてから

このうち、天才の孤独という人々が思いつくのは、第二の天才的な仕事の形成期に見られるものだろう。この時期、天才は、周囲の人々が思いつかないようなアイデアを密かに温め、成長させていく。それには、徹底した自己内討論が必要であり、周囲の人々との交流は雑音になる。

そして、第三期になると、事態は急変する。それまで独占されていたアイデアは公開され、人々と共有されるものになる。孤独だった人生が急ににぎやかになるのである。天才にとって、

この時期の過ごし方はむずかしいものになる。アイディアを浸透させるためには人々を迎え入れなければならぬ。しかし、さらにそれを発展させるためには、非共有の世界を生み出す孤独な作業を継続させる必要がある。

このように、天才の仕事は、共有と非共有のあいだで揺れている。一方、通常の人の心は共有世界に強く依存している。その心の用い方は天才の場合より楽である。なぜなら、わからないことについては共有の知識や記憶に問い合わせればいいからである。

天才のように、答えになかなか届かない問いを出し続け、わずかな手ごたえを頼りに探り続けるためには、それ相応の心の癖のようなものができていなければならない。それが形づくられるのが第一期の、天才的な仕事を始める前の孤独な少年期だと思うのである。だから、天才となるために最も重要なのは、この時期である。もちろん、人は一人では生きていけない。天才といえども、周囲の人々に支えられて育つ。しかし、その独自の思考方法を形づくるには、人々からの影響を受けにくい孤独な場所が必要だったと思うのである。

⑧ 共有と非共有のあいだ

以上述べてきたように、天才になるためには、ほどほどの、人々との共有生活と非共有の思考生活の併存が必要である。では、その兼ね合いはどのようなものとなるのだろうか？ これ

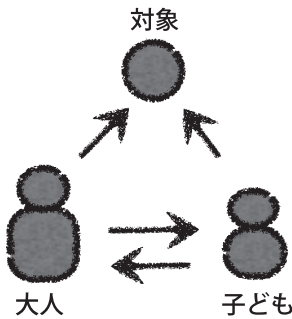


図1 共同注意の成り立ち

について考えるには、通常の人々の心の育ちと天才のそれとを比較してみることが必要である。そこでまず確認しておかなければならないことは、天才も通常人と文化を共有しているということである。天才といえどもゼロから文化を創造することはできない。先人が築いた文化を周囲の大人を通して吸収し、やがて、そこに自ら創造したものを付け加え、文化自体を改変する、というプロセスをたどる。その際、文化の受け取りと引き渡しには人々との共有物である言語が用いられる。

この、言語の獲得には、三項関係にもとづく共同注意の成り立ちが必要であると発達心理学では考えられている。共同注意とは、図1に表したように、子どもと大人が同一の対象に注意を向けることによって成り立つ。また、この場の成立には、子ども・大人・対象という三項が必要なので、その形を三項関係と呼ぶ(トマセロ 二〇〇六など)。

共同注意は、最初、対象への注視や指さしや対象物の受け渡しの形で表れるが、やがて言語による指示という形に発展する。そして、指示対象は、物から出来事へ、さらには概念へと発展していくのである。

天才も、人としての文化的土台を形成しておくには、